

基地・軍需工場に
囲まれていた東村山

終戦近い一九四五(昭和20)年、東村山の上空は編隊をくんだ米軍B29爆撃機がひっきりなしに通り返していききました。

サイパン方面から富士山を目標に日本に上陸したB29は、JR中央線に沿って東京をめざし、東村山周辺の軍需工場(武蔵野、立川、東大和西東京など)や立川、所沢の軍事基地に爆撃をくわえました。東村山はその飛行ルートにあたっていたのです。

墜落したB29
兵士・住民が死亡

一九四五(昭和25)年四月二日、五〇機のB29が軍需工場などを爆撃。そのうちの二機が対空砲

火が命中して炎上、東村山の秋津に墜落しました。民家が一戸全焼、二十三人が被害を受け、三人が死亡、米兵乗組員十一人も全員が亡くなりました。直径四十メートルほどの穴があき、飛行機の残骸

や死体が近所の住民や近くの全生園(せんしょうえん)のハンセン病の患者が死体処理などのつらい作業のために動員されました。飛行機が落ちたところは、小俣権次郎さんの所有地。米兵の亡骸や飛行機の残骸には住民の憎悪の視線がそそがれ、中には死体を引きずり回す人もいました(当時、付近に住むU氏の目撃談)。

「敵国」兵も
手厚く葬る

そんななか、地主の小俣さんは「仏様になれば、敵も味方もない」と住民をなだめながら、観音経を唱えながら肉片をひとつひとつ拾いあつめました。その姿をみて住民も協力をはじめ、収容した遺体は近くの墓地に手厚く葬られました。



終戦を迎えた小俣さんは、異国の地で亡くなった米兵や犠牲になった住民のために観音像を建立することを決意しました。小俣さんは家族とともに観音像建立のための資金を蓄えるため必死に働きました、高齢と高血圧のためついに病の床についてしまいました。やがて多くの人の協力で資金も



平和観音像、奥が小俣家

平和を求めて

41

私の町の戦争跡

仏様になれば敵も味方もないー墜落した米兵手厚く埋葬

戦後日米をむすんだ平和観音像(東村山市)

戦後十五年経て
平和観音像が完成

集まり、木製の観音像の原型ができあがりました。しかし小俣さんは木製の観音像の原型をができて一ヶ月後の一九六〇(昭和35)年七月、ついに息をひきとりました。

平和観音像が完成したのは、その年の十一月二十七日。終戦から実に十五年を経っていました。

除幕式には、アメリカの軍楽隊も吹奏し、米兵の遺族などたくさんの方々が参加しました。

その後、小俣さんのお子息は、戦死した米兵の故郷、テキサス州に招かれ、小俣さんは大切に保存してあった遺品を遺族に返しました。この小俣さん一家の話は、全米の新聞紙上でも「オマタズストーリー」として報道され、小俣さんの長女は国際結婚でテキサス州に住んでいます。日米の庶民の心をつないだ小さな平和観音像はいまも道脇にひっそりとたたずんでいます。(平和観音像は東村山市秋津町一丁目の志木街道沿いにあります)